早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　17号―1　2009年9月



# 都市空間と孤独者について

## ― *The Prelude* Book VII における London Beggar の考察―

大　石　瑤　子

## はじめに

自然詩人として親しまれている William Wordsworth（1770-1850）が，『序曲』第７巻において大都市ロンドンを扱ったことは一見意外なことであるように思われる。第１巻や第２巻で，詩人は少年時代の自然との神秘的な触れ合いを描き，自然が詩的霊感の源泉であったと述べている。これに対して，第７巻で，詩人は，青年時代のロンドンという自然が限りなく背景に追いやられた場所での体験を語る。詩人は自然というインスピレーションを与えてくれる対象から距離をおき，なぜ激変する近代都市をテーマに選んだのであろうか。その理由は，ロンドンという自然から隔絶された場に，今までと異なる新たな想像力の源泉を見出したためと考えられる。注目すべきは，ロンドンに住む社会的弱者に向けられるまなざしの変化である。本稿では，ロンドンの底辺にすむ弱者に対する詩人の態度の変化を通じて，「混沌の空白」(1)という言葉であらわされた都市の在り様，スケールの大きさに対する詩人の認識が，どのように変化したかについて考察したい。

## １．都市の傍観者

Moorman によると，『序曲』第７巻で語られているワーズワースのロンドン滞在体験は，1791年２月初旬から５月下旬までの４ヶ月間である(2)。当時，ロンドンは近代都市への急激な変貌の途上にあった。ジョージ３世治世の「共有地囲い込み」に代表される農業近代化は，農村内部の荒廃をまねいた。貧困から土地を売ることを余儀なくされた農民は，職を求めて工業地帯であるロンドンへ流れ込んだ(3)。そのため，都市の人口は急激に増加し，路頭は人であふれていた。詩人はコッカマスの田舎で幼少時代を過ごしており，故郷とロンドンとの環境の落差が，詩人に強い衝撃を与えたことは想像に難くない。第７巻において，描写される光景のほとんどは中心地の雑踏や喧噪である。詩人は，ロンドンの典型的な描写として，St Bartholomew Fair の喧騒を提示している。この縁日において，詩人の心をとらえたのは，色彩の奇抜さと混沌であった。

What a hell
For eyes and ears! what anarchy and din
Barbarian and infernal, 'tis a dream,

Monstrous in colour, motion, shape, sight, sound!
Below, the open space, through every nook
Of the wide area, twinkles, is alive
With heads;

（VII 658-64）

目にとって耳にとって，
なんという野蛮で地獄のような無政府状態と
混乱と喧騒なのか。これは，
色彩，動き，形，光景，音のすさまじい夢なのだ。
下に目をやると，そこには広場があり，
その広い空間の隅々まで，きらめき，
人の頭で生きているようだ。

（第７巻 658-64 行）

St Batholomew Fair の光景に詩人が見るものは，都市のきらびやかさと猥雑さである。都市はとてつもないエネルギーにあふれているが，それらのエネルギーは抑制されることなく，狂気じみている[(4)]。幼い詩人の感性を育んだ，自然によって統治され，静謐のうちに外界の事物が調和した光景と，ロンドンの街頭に広がる光景はかけ離れたものである。自然から切り離され，制御を失った「混沌の空白」[(5)]と呼ぶにふさわしいこの光景に，詩人は圧倒される。だが，この光景の一員となって，騒乱に身をゆだねようとはしない。かわりに，彼は Muse の援助を請い，この喧騒の様子を一歩引いたところから眺めようとする。彼はそのようにして，都市の群衆との間に心理的な距離を保つことによって，都市の混沌に完に飲み込まれ精神の均衡を失ってしまうことを回避しようとしたのである。

詩人の都市に対する傍観者的な態度は，盲目の乞食との遭遇をのぞいて，第７巻全体を通じてみられる態度である。さらに，この態度は，ロンドンに住む社会的弱者に対して向けられる詩人のまなざしにも見ることができる。例えば，都会に出てきた詩人が初めて売春婦の Mary 知ったとき，彼は人間性を喪失して穢れてしまった彼女の魂に対して心を痛め，「つよい悲しみの感情が私を包んだ」（“The sorrow of the passion stopped me here”）（434）と語っている。しかし，彼の悲しみは同情の範疇を超えるものでなく，詩人はこの売春婦と自身の間には深い溝があるものとして，「その当時は / これ以上深く思索することはなかった」（“farther at that time/ Than this I was but seldom led”）（432-33）という。詩人の語る「深い溝」とは，彼の傍観者的な態度ゆえに生じた Mary と詩人との心理的距離のことを指していると考えられる。また，第７巻には雑踏に生きる物乞いの姿が他にも多く登場しており，詩人は盲目の乞食に出会う少し前にも，両足を失った男や，石畳にチョークで身の上を書きつけ，その傍らに寝そべっている水夫などを目撃している。この者たちは，戦争や貧困によって

ロンドンの路頭に流れ着いた社会的弱者である。しかし彼らの姿をみても詩人は盲目の乞食に抱いたような感情を抱かない[6]。このことは，盲目の乞食と遭遇する直前の詩人の精神が未だ発展途上であり，彼らのもつ象徴性に気づけなかったことを窺わせる[7]。精神の均衡を保つためにとった傍観者的態度は，詩人の感受性を鈍化させたのである。

さらに，詩人の傍観的態度は群集と詩人の心理的距離にも見ることができる。しかしそれは，群衆と彼の間の不調和を自覚させ，孤独感を誘発するものであった。ロンドン在住中，詩人はしばしば雑踏を行き交う人々を眺めたという。だが，彼は人々を「ひまにまかせて，日々眺め」（“At leisure let us view, from day to day,”）（VII 244），観察するうちに，彼らが多様であるようでいて，実はある種の画一性に支配されていることに気づく。

Briefly, we find, if tired of random sights
And haply to that search our thoughts should turn,
Among the crowd, conspicuous less or more,
As we proceed, all specimens of man
Through all the colours which the sun bestows,
And every character of form and face.
（VII 233–38）

要するに，雑然とした眺めに飽きて
おそらく思考を探究にむけるべきなのだが
群衆の目立つ人，またそうでない人の中を
歩いてゆくと，太陽の与えるすべての色調と，
形体と容貌のあらゆる特徴を手がかりにして
私たちは人間のあらゆる見本を見出す。
（第7巻233–38行）

群衆の中の人々はあくまでもある人種，職業によって特徴付けされた人間の類型であり，個人として詩人に語りかけてくる存在ではない。個々の人間としてみることのできない群衆への思いは，「私の傍らを通り過ぎる人々の顔は / みな不可思議である！」（“The face of every one / That passes by me is a mystery!”）（VII 596–97）という心の叫びとなって現れる[8]。

Above all, one thought
Baffled my understanding, how men lived
Even next door neighbours, as we say, yet still

Strangers, and knowing not each other's names.

(VII 117-20)

何よりも，一つの考えが
私を困惑させた。それはよく言われていることだが，隣人と呼ぶ人びとですら
見知らぬ人々であり，互いの名前さえ知らずに
どのように生活しているのか。

（第７巻 117-20 行）

顔を見ればだれかわかるような環境で育った詩人にとって，都会のこのような状況の中で強い孤独感を覚えたことは想像に難くない。かつて幼少の頃に自然に求めていたような精神的なよりどころは，雑踏の中には見出すことが出来ない。ここで注目すべきことは，雑踏における孤独と少年時代における孤独の質の違いである。少年時代の孤独は人間や人里から隔絶されていても自然との一体感に支えられたものであり，自然との交感によってインスピレーションを得る心理的条件というべきものであった(9)。これに対し，成人となった詩人が感じる都会での孤独は，群集から距離を置いたために体験されるものであり，少年期の孤独のように，詩人に詩的インスピレーションを与えるものではない。詩人は自然によって与えられていた自身の存在のよりどころと等価のものを，想像力によってみずから都市の中で見つけ出さなくてはならないのである。

## ２．盲目の乞食との出会い

第７巻において，詩人は終始都市の傍観者として振舞うのであるが，盲目の乞食との遭遇の場面だけは例外である。乞食に遭遇する直前，雑踏を眺めていた詩人は日常的な感覚を失い，雑踏と一体化するような感覚を覚える。

Until the shapes before my eyes became
A second sight procession, such as glides
Over still mountains, or appears in dreams;
And all the ballast of familiar life,
The present, and the past; hope, fear; all stays,
All laws of acting, thinking, speaking man
Went from me, neither knowing me, nor known.
And once, far travelled in such mood, beyond
The reach of common indications, lost
Amid the moving pageant …

（VII 600-09）

やがて，目の前の形は千里眼で見るような行列となって
静かな山を滑るように越えてゆくようにも
夢の中の光景の中のようにも思えた。
そして日常の生活を安定させるものがすべて，
現在，過去，希望，恐怖，そしてすべての支え，
行動し，思考し，話をする人間のすべての法則が
私から遠ざかり，わたしを認めることも　わたしが認めることもなくなった。
そして，一度などそのような気分が
日常の指標をはるかに超えてしまったために，
行列の動きの中に己を見失った。

（第7巻600-09行）

雑踏を行きかう群集との距離感を失ったとき，詩人は「日常の生活を安定させるものがすべて」そぎ落とされ，風景と一体化する。この時，傍観者的態度を保つことによって，混沌に自己を飲み込まれることを回避していた詩人は，「己」を失う。このような精神状態に陥ったまさにその時，詩人は「偶然にも」（"'twas my chance"）（609），独り雑踏にたたずむ盲目の乞食に遭遇するのである。乞食の様子は以下のように語られる。

'twas my chance
Abruptly to be smitten with the view
Of a blind Beggar, who, with upright face,
Stood, propped against a wall, upon his chest
Wearing a written paper, to explain
The story of the man, and who he was.
My mind did at this spectacle turn round
As with the might of waters, and it seemed
To me that in this label was a type
Or emblem, of the utmost that we know,
Both of ourselves and of the universe.

（VII 609-19）

偶然にも，

突然，独りの盲目の乞食のすがたにうたれた。
彼は顔をまっすぐに擡げ，
壁によりかかって立ち，その胸には
紙をぶら下げていた。
そこにはそれまでの経歴と名前が書かれてあった。
この光景を目にすると　私の心はあたかも水の力を受けたかのように
回転した。そしてこの札の中に
わたしたち自身と宇宙に関して
わたしたちの知りうる限りの
ものの典型，あるいは象徴があるように思えた。
（第7巻609-19行）

行列の動きの中で独り静止し，流動する群衆のひしめく雑踏の風景から浮いた存在であった乞食に不意に目を向けたとき，詩人は精神の均衡を保つために拒絶してきたもの，つまり，都市の混沌やその中でうごめく無秩序かつ巨大なエネルギーといったものを，受け入れざるを得なくなったと考えられる。盲目の乞食は，ロンドンが抱える貧困，孤独，苦しみなど負の側面を一手に背負った存在であり，巨大な都市に翻弄されたその身を，無防備にさらしている。そして，一個の物体のようになった乞食は，胸に貼り付けた紙によってのみ，自らの人間としての属性を主張する。Jonathan Wordsworth は「詩人が驚愕したこととは，人間であることを主張するのには一枚の紙切れで十分である，という事実そのものであった」(10) と指摘するが，すなわち，詩人は，人間の存在の矮小さと，人間を取り巻く都市の巨大さを，同時に突きつけられたのである。

## 3．弱者への眼差しの変化

詩人は盲目の乞食を，「あたかも / 別世界からの警告であるかのように見入った」（“I looked / As if admonished from another world”）（621-22）という言葉で表現したが，盲目の乞食に向けられる眼差しは，娼婦の Mary に向けられていた同情的なものと，明らかに違うものである。第三者的な視点から，Mary を見たとき，詩人は彼女個人の悲劇に同情することはあっても，彼女を取り巻く都市に目を向けることはない。たいして，盲目の乞食を見たとき，詩人は乞食の存在を通して，都市の混沌と大きさ，詩人を含めた人間の存在の小ささを直感する。この時の衝撃を，詩人は「私の心はあたかも水の力を受けたかのように / 回転した」と語っているが，一見劇的とも取れる認識の変化は，実際のところ乞食と遭遇する以前に予期されていた。『序曲』第8巻において，詩人はロンドンを初めて訪れた時，都市の境界を感じ，都市の歴史の重みを感じたという。

‘The threshold now is over past’, great God!

That aught *external* to the living mind
Should have such mighty sway, yet so it was!
A weight of ages did at once descend
Upon my heart–no thought embodied, no
Distinct remembrances, but weight and power,
Power growing with the weight! Alas, I feel
That I am trifling; 'twas a moment's pause,
All that took place within me came and went
As in a moment, and I only now
Remember that it was a thing divine.　(VIII 700–10)

私は「いま境界を越えた」のだ。なんということだ！
生命ある精神の外にあるものが，
このように偉大な力を振るうとは！ しかし，それはそのように存在したのだ！
歴史の重みが一気に私の心に
のしかかってきた。それは思考として具現化されたり
はっきりと記憶に残るものではなかったが，重みと力であり，
力は重みを増すとともにどんどん大きくなった！ ああ，私はいまになって感じる。
私はとるに足らないものだと。それは一瞬の停止だった。
私の内部で起きたこと，それはすべて一瞬のうちにやってきて
そして去っていったかのようだった。また，いまだ私が覚えているのは，
それが神聖なものであったということだけだ。
（第8巻700–710行）

ロンドンの境界を越えた時，詩人は都市の歴史の重みを感知したという。しかし，詩人の感知したものは一瞬に生じ，すぐに去っていってしまったため，ロンドンが彼に働きかけてきたものを完全に掌握することが出来ずに終わる。その後，彼は，ロンドンの色彩の奇抜さ，スケールの大きさに感嘆するとともに，己を見失う不安を抱き，都市と自分との間に心理的距離をおく。この過程で，詩人はロンドン入りの際，すでにつかみかけていた「神聖なもの」から遠ざかり，雑踏の中で己を失い，盲目の乞食と遭遇するまで，すでに感知していたものを見出せずにいたのである。

弱者に共感しながらも，第三者的な態度で接し，弱者を囲む都市に目を向けることがなかった段階から，群集と一体化し，盲目の乞食を通じて，彼と詩人自身を取り巻く都市の巨大さと人間の存在の矮小さを直感する段階へ，詩人は新しい創造的段階へ足を踏み入れたといえる。『序曲』におけるロンドン滞在のエピソードに見られる，人と人を取り巻く外界に対する認識の変化は，他の作品にも

見ることができる。たとえば『抒情歌謡集』の第一巻に収録されている 'The Female Vagrant' は，彼女の過去の幸福，貧困による没落を描き，物語詩としてワーズワースの他の作品にはない波乱にとんだストーリーを有している[11]。しかしながら，詩人自身が，1814 年に Payne Collier に「この詩は素朴な同情心に訴えたもので，想像力をほとんどもたないか，あるいは，欠いたものだった。」("It was addressed to coarse sympathies, and had little or no imagination.")[12]と語ったように，この作品をあまり評価していない。詩人が「素朴な同情心」("coarse sympathies") というように，詩人の女浮浪者に向ける眼差しは，同情的である。そして，その眼差しは，ロンドンの娼婦に向けられた同情と同質のものであるだろう。そしてロンドンの娼婦に対する同情心が詩人の想像力を鈍化させ，詩人が「その当時は / これ以上深く思索することはなかった」("father at that time / Than this I was but seldom led,") (433) のと同様に，この作品も一個人の悲劇を追求するものの，詩人の態度は傍観的であり，彼女や詩人を取り巻く社会そのものへの洞察は不十分なままに終わる。ワーズワースが詩人として成長するためには，自身の「素朴な同情心」を超えなければならなかった。

'The Female Vagrant' 同様に，'The Ruined Cottage' は，不況による貧困と戦争によって夫を失った Margaret の悲劇をうたったものである。しかし，詩人は主人公である Margaret の悲劇に深い悲しみを寄せつつも，彼女や詩人を含めた人間を取り巻く自然に目を向けようとする。度重なる苦境の中で，わずかな希望の光である夫の帰りを待ち続け，衰え，孤独のうちに死んでゆく，Margaret の人生そのものに，安らぎや平和といった救いの要素を見出すことはできない。だが，物語の語り手である行商人は，彼女の死にたいして，「彼女はいま穏やかな土の中に眠り，平和があるのだから」("She sleeps in the calm earth, and peace is here.") (512) と言った。行商人の言葉は，マーガレットの生涯に象徴される悲劇から，この物語を脱却させ，人間の存在を支配する自然そのものに読者の目を向けさせるものであろう。'The Ruined Cottage' を見てみると，この詩人の関心が個人の悲劇から，それら人間を包括する自然に向かっていったことが分かる。'The Ruined Cottage' とほぼ時を同じくして書かれた，'Tintern Abbey' において，詩人は「何かいっそう / 深く浸透するものがあるという崇高な感覚」("a sense sublime /Of something far more deeply interfused") (98-99)[13]を体験したと語ったが，このような森羅万象を統括する巨大な存在への気づきの背景には，人々と彼らを取り巻く外界に対する認識の変化があると考えることができるであろう。

## 結論

第 7 巻における，詩人の弱者に対するまなざしの変化を通じて，詩人の都市に対する態度の変化を見ることができる。ロンドンに来た当初，詩人は近代都市への変貌のさなかにあり，エネルギーにあふれながらも無秩序な街の様子に圧倒され，己を見失うことを回避するべく，都市と距離を置こうとする。それゆえ，彼の都市の出来事に対する態度は常に傍観者的であり，都市の底辺で生活する娼婦やその赤子，路上の物乞いに対するまなざしも，同情心の範疇を超えることはなかった。だが，雑踏で群衆と一体化する体験を経て，詩人はそれまで受け入れることを回避していたもの，つまり都市の

巨大さ，混沌としたエネルギーを突き付けられる。都市に翻弄され，胸に張った紙でしか人間性を主張することのできぬまでに貶められた，盲目の乞食の姿は，単なる同情の対象ではなく，その存在の矮小さゆえに，乞食と詩人を取り巻く空間の巨大な力を直観させる畏敬の対象として映ったのであった。弱者に同情しながらも，第三者的な態度で接し，弱者を囲む都市に目を向けることがなかった段階から，盲目の乞食との遭遇を通じて，詩人自身を取り巻く都市の巨大さと人間の存在の矮小さを直感する段階へ，人間を取り巻く外の世界に対する認識の発展には，ワーズワースの詩人としての進歩が見られるように思われる。

注(1)　*The Prelude* VII 695. なお，以下 *The Prelude* の引用は Jonathan Wordsworth, ed., *The Prelude 1798, 1799, 1805, 1850* (Penguin Books, 1995) の 1805 年版に拠る。

(2)　Mary Moorman, *William Wordsworth: Early Years 1770–1803* (Oxford: Clarendon Press, 1957) 153-61.

(3)　G. M. トレヴェリアン『イギリス史』第 3 巻 大野真弓美（訳）（みすず書房，1986 年）103-04 頁。

(4)　Jonathan Wordsworth, *The Borders of Vision* (Oxford: Clarendon Press, 1982) 301.

(5)　The Prelude VII 695.

(6)　吉野昌昭「道に迷うワーズワース」『ワーズワースと『序曲』』吉野昌昭（編）（南雲堂，1994 年）197-228 頁を参照。

(7)　吉野昌昭，197-228 頁を参照。

(8)　Jonathan Wordsworth, *The Borders of Vision* (Oxford: Clarendon Press, 1982) 301.

(9)　Raymond Dexter Havens, *The mind of a Poet* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1941) 55.

(10)　Jonathan Wordsworth 304.

(11)　上島建吉，解説注。ワーズワース，コールリッジ著『リリカル・バラッズ』第 3 巻　上島健吉（編）（研究社，1993 年）94-95 頁。

(12)　E.de Selincourt and Helen Darbishire, ed., *The Poetical Works of William Wordsworth*, vol. 1 (Oxford: Clarendon Press, 1952-59) 334.

(13)　以下，'Tintern Abbey' の引用は Duncan Wu, ed., *The Romanticism* (Blackwell, 2006) に拠る。